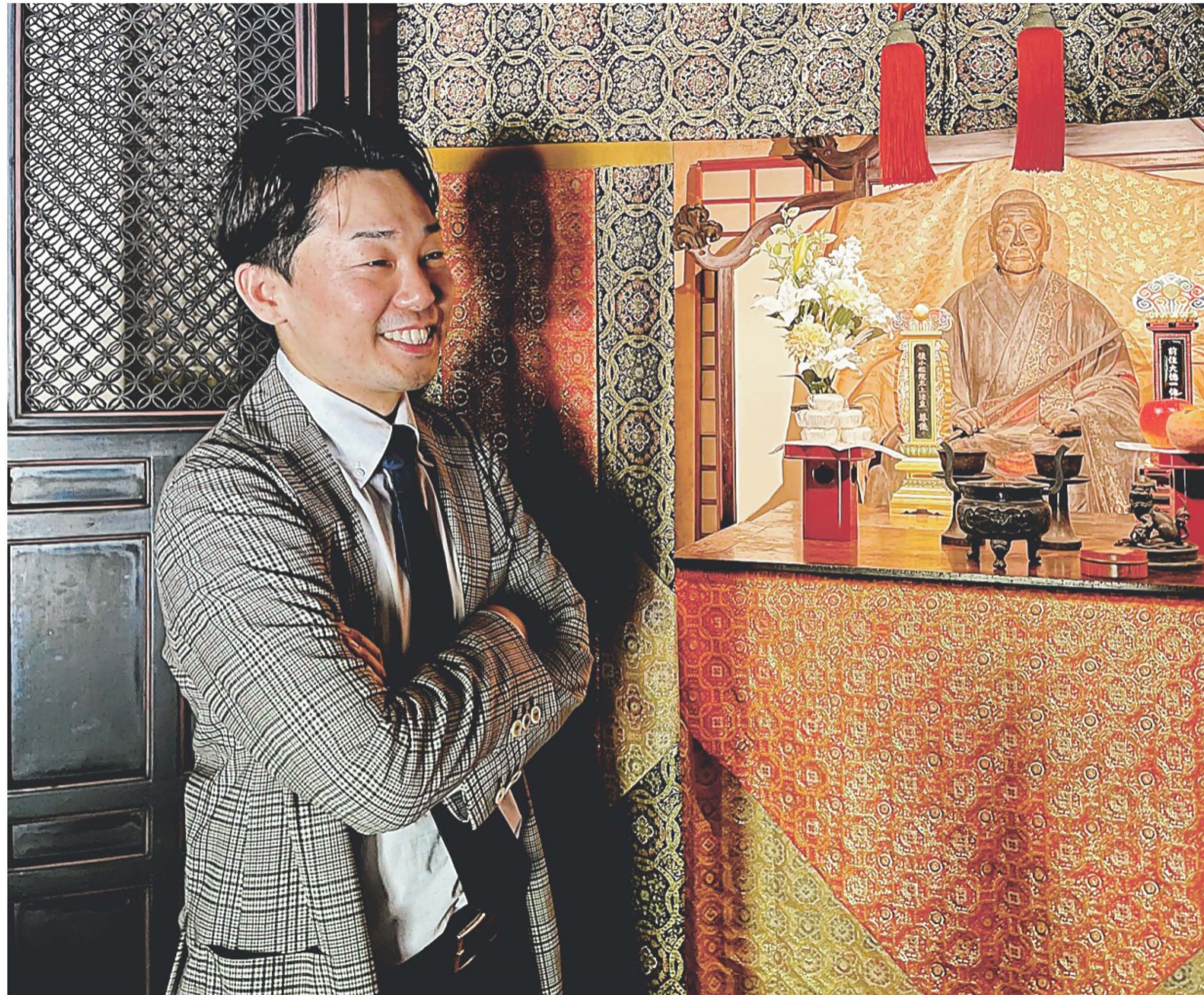


編集委員 インタビュー

花園大学国際禅学研究所副所長 飯島 孝良さん(39)と問答する

一休さんは元祖フーテン?



一休宗純が森女と最期を過ごした京都府の酬恩庵一休寺で

大徳寺を開いた宗峰妙超(大燈国師)は故郷たつの市に宝林寺があり顕彰されていますが、一休の師、華叟宗曇は地元でも知られていません。

「一休の句に『華叟子孫不知禅(かそうのじそん、ぜんをしらず)』というのがあります。大燈国師や華叟を継ぐのは自分だけで、兄弟子たちは禅が分かっていない、という強烈な自負です。一休はアニメで描かれているように、天皇の皇子でありながら幼時に安国寺に預けられました。当初は『周建』と呼ばれていましたが、27歳のときに滋賀県で悟りを開いた際、華叟が与えた名が一休。休とは『休歇』『つまり』『悟り』を意味します」

「宗峰妙超は長年、京都の河原で貧民と暮らす『乞食行』をした後、花園天皇に召し出されて国師と呼ばれました。一方、華叟も大徳寺を出て琵琶湖畔で厳しい修行をしていました。華叟の幼少期はほとんど記録がなく、近江出身説もあって本当はたつの出身じゃなかったかもしれませぬ。華叟の死後、『大燈国師と同じ

じにしておこう』と語り継がれていた可能性もあります」

そんなことがあるんですか。最近の歴史修正主義のようでは?

「いえいえ、尊敬される僧ほど後代、高めて語られるのはよくあること。逆に不都合なところは残らないことも。一休は晩年、森女と呼ばれる盲目の若い女性と暮らしましたが、一休の弟子たちは森女のことを記録に残しませんでした。当時は男性の同性愛も盛んで、一休も男色をもじって『勇巴』と言いつつ換えた詩を詠んでいます。弟子たちと森女はとも一休を支えながら、ライバルでもあったのでしょう」

「大燈国師の百年忌に一休が詠んだ漢詩も衝撃的です。『宿忌以前美人に對す』。法要のさなかに美人と色ごとをした、というのです。美人は大燈国師を指すという解釈もありますが、後の詩にも『姪水』など直接的な表現があります。自分を捜すなら『酒肆娼坊』を訪ねろ、とも書いています。居酒屋や売春宿に入り浸る禅僧は珍しくはないにせよ、ここまで大っぴらにアピールする人はそういな」

実はパンクな破戒僧 / 乱世に警鐘、現代にも響く

パンクロッカーみたいで、ぶっ飛びすぎていませんか。

「一休は華叟門下の兄弟子、養叟宗頤(1376~1458年)と激しく対立し、寺に定住しないフーテン暮らしを選びました。風顛とも書きます。常軌を逸した人というよりは、とある辞書の『通常の社会生活からはみ出して、ぶらぶらと日を送っている人』という解釈がぴったり。『男はつらいよ』の寅さんですね。象徴的なのが朱太刀の逸話です。養叟が富裕な商人に布教するのを皮肉って、一休は木の剣を手に堺の港町を歩いた。『木剣では人も殺せないのに』と問われると『二セ坊主と同じだ。人を殺すことも活かすこともできん』と返した。権威に安住する兄弟子を『斬って捨てろ』というパフォーマンスが庶民に受け、一休の頂相(肖像画)は大きな朱太刀を傍らに描くのが定番になります」

「悟りを開いたことを師が証明する『印可状』についても、一休はストイックでした。自身が華叟から受けた印可状を破り捨てた上で、華叟からもらった掛け軸を印可証明と勘違いした養叟に対し『もし印可を主張したら、私が破り捨てる』と公言しました。自分の弟子たちにも決して印可状を与えない」と言い残した。一休が最晩年に病床で弟子の一人を後継者にと口にしたところ、その弟子本人が『師がそんなことを言うはずがない。もうろくしたか、病で狂ったかだ』と拒否したほどです」

一休はただの墮落僧ではなかったのですね。頓知話のヒーローになったのも人気があったからですか。

「兄弟子でライバルの養叟は悪役で描かれがちですが、大徳寺の住持(住職)にまでなつて組織を維持するために努力したのは確かでしょう。応仁の乱で京都が焼け野原になると、一休も住持を引き受けて再興に尽くしました。ただ、大徳寺には住ま



一休寺に伝わる一休宗純の頂相(肖像画)。ざんばら髪で無精ひげを伸ばしている(一休寺提供)

戦後がジャンプ? アニメで人気が出たというのですか。

「いえ、真面目な話です。戦時中までは皇国史観など国家が中心の思想でした。敗戦で価値観が一変し、民衆の視点から歴史を考える動きが広がり、能や作庭など、差別されていた民衆が文化を生み出した室町時代に注目が集まりました。唐木順三や加藤周一といった戦後を代表する知識人が一休の批判精神を論じ、禅寺の小僧から作家になった水上勉の評伝小説もヒットしました。頓知小僧ではなく、大人の一休を知る人が増えたのです」

2016~17年のNHKアニメ『オトナの一休さん』は史実を取り入れ、なお刺激的でした。

「作画した伊野孝行さんの著書となりの一休さん』に収められた対談でもお話ししましたが、一休はエロチックなことも言っているけれど、一番冗舌に語ったのは乱世への警告だと思えますね。現代社会でも、伝統的な宗教文化への無知が疑似宗教への妄信へとつながってしまっています。新型コロナウィルスに対しても、宗教界が心のよりどころをうまく示せていない一方で、疑似科学のような陰謀論が広がっている。一休に『喝!』と言われてしまっくんじゃありませんか」

いじま・たかよし 1984年東京都葛飾区生まれ。東大大学院人文社会学系研究科博士課程修了。博士論文が「語られ続ける一休像」として出版された。2021年から花園大専任講師、23年から現職。